

yucca-note

自然観察録

No.1

2012.12.10-2013.7.12

yucca

神秘学遊戯団

yucca-note 2012.12.10

チョウゲンボウ



寒い寒〜い日曜日の鳥見。田んぼの上の電線にチョウゲンボウ。車内から観察。ほぼ目の高さで観察できるのははじめて。は頭から顔にかけてと尾がブルーグレイというけれど、これまで会えたのはほとんどだったような。撮影：KAZE

ミヤマホオジロ



引き返そうかと思うほどの風雪のあと、青空。それでも時おり雪が舞うなか、ミヤマホオジロ（♀）が水浴びしてました。ちょっと日陰で薄暗いけれど、ミヤマホオジロの水浴びを至近で見ることができて、うれし。黒と黄の印象深い三角の頭、いつもビオラの花を連想してしまう。。黒い額に雪片が載ってます。撮影：KAZE

ウソ



ウソに会えました。ほんとに（笑）。この紅色が見たかった。アトリなどの、オレンジがかった渋い赤もいいけれど、こういう紅色はまた格別。オス一羽とメス三羽のグループ。メスの羽色はモノトーン。このオスは胸のあたりにも赤みがあるので、もしかすると亜種のアカウソかも。桜や梅の花芽を好むということですが、実際最初に見つけたときも、桜（ヤマザクラ？）の高い枝で、花芽をむしゃむしゃ。それからヒサカキの木に移動して、またむしゃむしゃ、黒い実が嘴からはみ出るほど。

ウソのオスを照鷺（てりうそ）、メスを雨鷺（あめうそ）と呼ぶ（広辞苑など）とは今まで知りませんでした。

西行法師の『山家集』に

桃園の花に紛へる照鷺の

群れ立つ折りは散るこちする

という歌があるそうですが（三省堂『世界鳥名事典』）花の色と羽の色が混然となって漂い出すようなイメージも浮かびます。

撮影：KAZE

yucca-note 2013.1.19

ジョウビタキ & アオジ



携帯写真撮影歴10ヶ月(^_^;)の私です。上弦の月（ほとんど写らず）のかかる冬木立。この後夕方の鳥見。出会えたのは、シメ2個体（今シーズン初めて）、アオジ6個体（♂3 ♀3）、ジョウビタキ、シロハラなど。鳥写真はKAZE。オレンジ色の尾が綺麗だったジョウビタキ♀とアオジ雄（地面で採餌中）。



yucca-note 2013.1.28

ルリビタキ



日曜朝の鳥見。気温は低く、昼近くなっても池の水面が凍っていたけれど、土曜の強風もおさまり、気持ちの良い晴天。山中の空気も光を含んでいつもよりさらに澄んでいるような。鳥もたくさん出てきてくれて、KAZEの鳥写真もどっさり…**v（選ぶのも大変だけど）。着いてすぐに鮮やかな羽色のルリビタキ♂。数名の鳥撮りカメラマンたちに囲まれて、けっこうサービスよく。今季♀（または若い♂）には何度か会えたけれど、♂は初めて。真冬のこの瑠璃色、染み渡る悦び^^。奥で別の個体も発見。こちらは青に少しむらがあり、枝影にかくれがちだったけれど、いろいろなポーズを見せてくれました。実際に見た印象でも、夏鳥のオオルリより明るいブルーに見えますが、脇の明るいオレンジ色も効いているのかも。



マヒワ



27日の鳥見の続きです。マヒワの小群。近くで見たのは、2年あまり前、西日を浴びてススキの穂を食べている群れを蒜山で見えて以来かな。身近な留鳥カワラヒワよりも小さく、ほっそりした感じ。黄・黒・白の配色にごま塩頭（？＾＾；）が目立つ、全体にグレーがかった淡い色合い（黄色もほの暗い）の。鶺鴒色（ひわいろ）というのは、このマヒワの黄色のことなんだーとあらためて見とれる・・朝の光のなかではとくに、きりっとしたレモンなど連想するような黄。ハンノキなどカバノキ科の種子をよく食べるそうで、このときもそんな実をついばんでました。この木はオオバヤシャブシ（ハンノキ属）だそうです。ハンノキの実ドライフラワーとしてリースなどに使われていますが（私もキャンドルにアレンジしてみたことあり）、木質化した松かさ状の鱗片の中から、器用に堅果を取り出してお食事中。ひたすら食べては、時々ふうっという感じで体を起こして一息つくようす、見飽きません・・

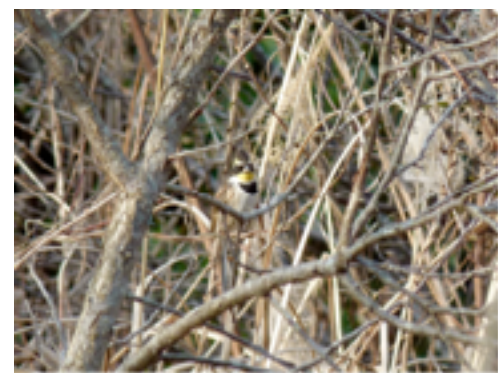
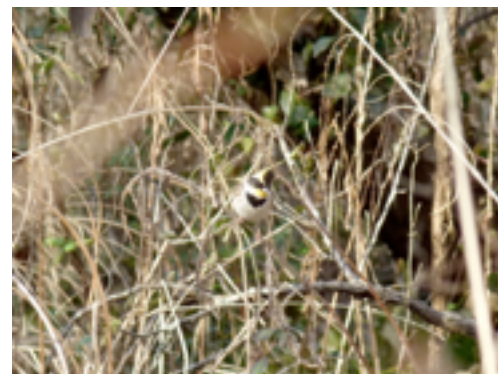


yucca-note 2013.2.11

シメ・ルリビタキ・マヒワ・ミヤマホオジロ



土曜日は近場で鳥見。風もあまりなく穏やかな晴天。前回と同じく最初にシメ2羽。枝から飛び下りてきて、ずいぶん近くに。隈取りしたようなこわもて（^^;?）だけど、嘴や脚はかすかに紅みを帯びて柔らかそう。ベージュ系の渋い色合いに、風切り羽先の深い青がさりげなく効いている。歩いて行くと、シメに続いてルリビタキ♂まで出現^^。そしてここでもマヒワの小さな群れ。アメリカ楓（フウ）の高い枝で、残っている果実（おもしろい形）を食べてました。遠いけれど♂と♀。少しずつ蕾が目立ち始めた梅の木近くには、ミヤマホオジロ。こちらはススキの穂をお食事中（写真は何れも♂）。梅の蕾のそばで蔓に囲まれてる♂は、今までで一番大きく撮れてるような。いろいろと盛りだくさんで、じんわりと充実した2時間あまり・・・撮影：KAZE



花崗岩メモ



最近、ゲーテの『地質学論集 鉱物篇』を少しずつ拾い読みしています。（今までずっと気になりながら、ほかの自然学的な著作集同様、積んどく状態^^:）「花崗岩について」Ueber den Granit という小論も含まれていますが、シュタイナーがこの「花崗岩について」に触れている連続講義（Mysteriegestaltungen GA232 『秘儀の歴史』西川隆範訳 国書刊行会）がとても印象に残っています。

時々野鳥観察に行く公園（玉野市）でも、花崗岩の露出した斜面が目につきます。中国地方の瀬戸内海沿岸に多く分布するのは、広島型花崗岩だそうです、瀬戸内地方で生活しているとかなり身近な石です。

直方体状に割れるのは方状節理、その角が風化して少し丸みを帯びた岩塊が積み重なり、独特の景観となっています。この近辺では、瀬戸大橋を見下ろす鷺羽山や、王子ヶ岳なども似た景色。

ゲーテは、若い頃から地質や岩石鉱物に関心があり、さらにワイマール公国の顧問官となった時の最初の仕事が、鉱山の再開に関する調査だったことなどもあって、地質、岩石鉱物研究がさらに本格的になっていったようです。

ゲーテは様々な場所に出かけては、特徴のある岩塊を観察し、岩石や鉱物のサンプルを夥しく集め、たくさんのスケッチ（専門の画家による）の目録が残されていて、感心させられます。

今の地質学では、花崗岩は最古のものとはされませんが、シュタイナーもゲーテに言及しながら、花崗岩の山を始原岩層（Urgebirge）と呼びます。珪酸（シリカ）に富む花崗岩と、石灰（カルシウム）に富む石灰岩を対極的に捉えているのも印象的です。

花崗岩は生成しつつある世界の、われわれに知られている最初の形成物である。それらを敬虔なまなざしで眺める人は、卑劣な考えから確実に守られている。

ゲーテ／木村直司訳

『地質学論集（ちくま学芸文庫） 』より

花崗岩の主成分鉱物は、石英、長石、雲母。

石英（英quartz 独Quarz）はシリカつまり珪（けい）酸（二酸化珪素 SiO_2 ）が結晶してできた鉱物。とくに無色透明なものが水晶と呼ばれる。

深成岩では、シリカ/珪酸をもっとも多く含むのが花崗岩で、次いで閃緑岩、斑糲（はんれい）岩の順。

珪酸が多いと白っぽい色合いとなり、珪酸が少なく鉄やマグネシウム（苦鉄質）が多いと黒っぽい色合いとなる。

タゲリ



何度見ても飽きないタゲリ。体長32センチ、と大きめなので、わりに見つけやすく、見栄えがします。びゅーんと伸びた長い冠羽に、玉虫色光沢を帯びる暗緑色の翼がチャームポイント。みゅうみゅう、と猫みtainな鳴き声に、つぶらな瞳も愛らしく、静かにしていると、どんどん近づいてきてくれたり。幅広い翼で飛翔すると、白と黒のコントラストが鮮やか。

R・シュタイナーの『精神科学と医学』（GA312 Geisteswissenschaft und medizin)第17講に、巧みな走り方の例として、タゲリが出てきているのがおもしろいです。子どもの歯の健全な発達のためには、手足を上手に動かすことが大きな意味を持つ、というような説明がされていて、編み物をさせたり、たとえばタゲリのような足取りで走らせたりするのがよい、と。

タゲリ（*Vanellus vanellus* 英Lapwing 独Kiebitz）は広くヨーロッパでも見られるようです。シュタイナーの言っている「タゲリのような足取りで走る」（im Kiebitzschrift laufen）というのが、ドイツ語圏で一般的な言い方なのかどうか、よくわかりませんが（調べた限りではあまり聞かないような）、シュタイナーもタゲリを見ていたのかな、と思うとちょっと楽しい・・・実際、タゲリたちを見ていると、両足を交互に素早く動かして走り（たた一つという感じ）、突然立ち止まっては、また走る、というような動きをします。時々足で地面をたたくような動作をする、とも言いますが（田鳧という字はこの動作から来ているとも）、これはまだ見たことなし。

拙試訳を始めた最初の頃は、タゲリを見たこともなく、この部分も、「タゲリ走りで（千鳥足で）走らせる」というような訳にしていたましたが、日本語で「千鳥足」というと、普通、酔っぱらった人などのふらふらした足取りのことで、ここで言われている器用に足を動かす走り方とは違うと思いますので、「千鳥足」という補足は削除しました。

今回の日曜鳥見は寒風きつく、ふたりとも少々疲れ気味だったので、歩き回らず主に車内から観察。

最近、KAZEのお古のデジカメで、わたしももたもたと記録用撮影の練習。

岩山の写真くらいは何とかなるものの、鳥はお手上げ

～（2枚目だけはyucca撮影^^；オバQなど思い出すキュートな後ろ姿。。4枚目は去年笠岡にて）

yucca-note 2013.2.22

ミヤマホオジロ



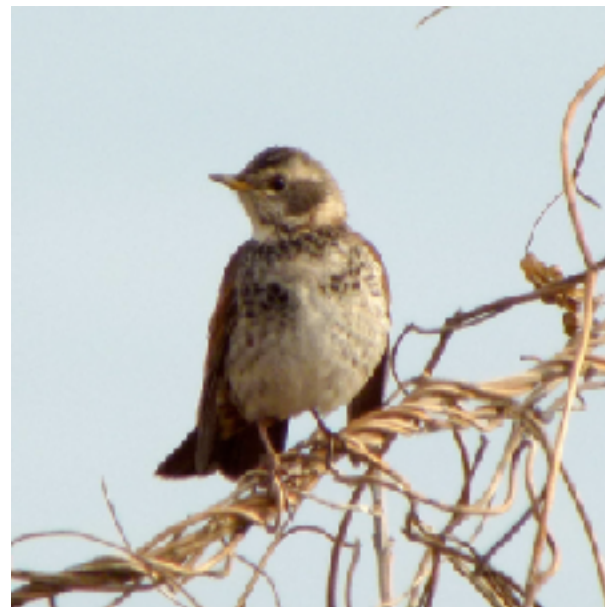
ミヤマホオジロメス♀。今年はミヤマホオジロに何度も会えて嬉しいけれど、なかなか♀のいい写真が撮れないね、と話してたところ、やっとかなりかわいく撮れたのが^^。♂だと真っ黒い部分が、♀では茶褐色。その分、黄色とのコントラストが柔らかく、全体のトーンもふわっとしている。♂♀7～8羽が、木の葉のように飛び交い、じっとしているとすぐ近くの枝に止まってくれる。樹木のアストラル体と鳥たちの関わり、とかいったことをぼんやりと思いつつ^^;、木に身を寄せ、風のかすかなざわめきに耳をすまし、鳥たちの飛翔の気配を感じ取ろうとするおかしい人間たちと、ちょっとだけ遊んでくれてるような。2/11 KAZE撮影



ツグミ



3月に入って、鳥たちがちらほら歌い始めました。まだ発声練習、という感じだけれど。近くの公園でウグイスのさえずりを聞いたのは先月23日。ここ数年3月初め頃、うちの近くで早朝にキョロン、キョロロ・・・と、短いけれど何とも言えない美声が聞こえ、ちらっと逆光で見た姿が、どうもツグミのような。野鳥のフィールドガイドにも、春の渡去前に、ポピリョン、ポピリョン、キョロキョロ、などとさえずる、とあり、今年は羽ばたいている姿を見ることができて、やはりツグミと判明♪まだ完全でない、つぶやくようなさえずりを「ぐぜり」と言うそうですが、もうすぐ山で歌い始めるクロツグミはじめ、ツグミの仲間はみな美声のよう。ツグミはまだしばらく山や田園でも見かけるけれど、この早朝の歌はいつも2, 3日のみ。もっと聴きたいと思っているうちに飛び去ってしまうけれど、鳥の歌の季節の先触れ、嬉しい贈り物。画像は歌っていたツグミではないけれど、先月のもの（撮影 KAZE）。とりのなん子さん「とりぱん」のホワイトつぐみんふう。



yucca-note 2013.3.19

イカル Eophona personata

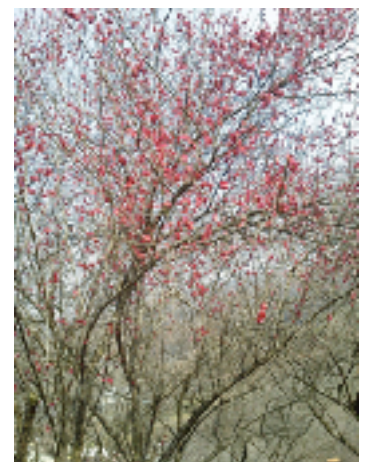


毎年のように訪れている梅の里。小高い丘陵地に、14種あるという梅が咲きそろうと、さまざまな花色が繊細な濃淡で香しい空気に溶け込み、なんとも美しい景色。この日まだ梅は三分咲き。でも人出も多すぎないだろうし、イカルなど鳥たちとの出会いを期待して出かけたなら大正解。遊歩道を登り始めてすぐに、檜(?)の葉陰であまり聞き慣れない地鳴きが聞こえ、しばらく目をこらすと木のとっぺんにイカルを発見。枝葉に半分隠れていたけれど、少し坂の上にいるKAZEサン、なんとか撮影に成功。ここではいつもあの魅力的な声が聞けるのに、めったに姿は見えず(23センチと大きめだけれどすぐに飛び去ってしまう)、遠くの木にでも見つけることができたらラッキーという感じだったので、嬉しいお出迎え。その後も、透き通った笛のような声は、梅の花の香り漂う丘の遠く近くに響き、梅の枝ではカワラヒワ、杉の林ではヤマガラの高らかなさえずり。夏鳥のサンコウチョウ(三光鳥)のさえずりを、ツキ、ヒ、ホシ、ホイホイホイ…と聞きなす、というのは有名だけど、イカルの声もツキ、ヒ、ホシ、と聞こえるので、イカルにも三光鳥の異名があるとか。のどかな、時に哀調を帯びた歌うような声は、ヒー、ホー、ヒー(高～低～高)というような抑揚で、ツキー、ヒー、ホシー、と聞こえなくもないような^_^;。グレー、白、黒に目立つ黄色い大きな嘴、黒い仮面をかぶったような、髭づらみたいな顔(チョコボールのキョロちゃん^▽^)。学名のEophonaは暁の声。しらじらと明け初める時、月と日と星と、かそけき光は織りなされ、キョロちゃんたちの仮面舞踏会・・・と、妄想は膨らむ。

春の日の長閑にかすむ山里にものあはれなるいかるがの声

寂蓮『夫木和歌抄』

参考：『俳句と詩歌であるく鳥のくに』風信子著/文一総合出版



yucca-note 2013.3.22

ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*



『とりぱん』でもお馴染みのヒヨちゃん。白い縦斑のあるグレーの体色に、ブラウンのチーク (@^^@) みたいな耳羽（じう）がポイント。大きく波形の曲線を描く飛び方。ピーヨ、ピーヨ、というよりは、キーイ、キーイ、などと聞こえる甲高い鳴き声、小鳥というには大きめで（体長27.5 cm）動きも活発、市街地でも公園でもどこでも見かけるので、ああまたヒヨちゃん、と、正直あまり気に留めないことがほとんど。でも、いつもヒヨちゃん軍団で騒いでいるわけではなく、ほわっと弛めた体を枝に乗せてまどろんでいたりと、ほかの鳥のさえずりのアレンジを織り交ぜた面白い鳴き方で、しきりに歌っていたり。梅林の端にいたこのヒヨドリも、ちょっと味のある表情を見せてくれたような。Photo by KAZE



日曜 (2013/3/25)鳥見メモ

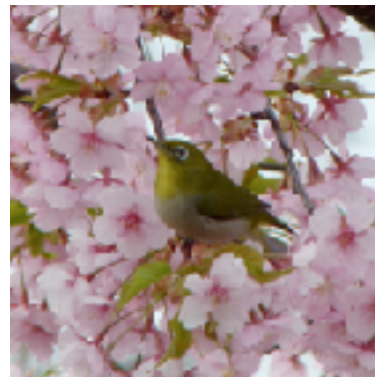


ツバメ到来に気づいたのは10日ほど前。日曜午後の鳥見。冬の水鳥たちで賑わっていた池もかなり閑散としてきて、周囲の木々や草地に少しずつ緑が。前方の枝にヒヨちゃん発見、と、いきなり車の前に飛び降りてきてびっくり**。少し歩いてみると、ヒバリ、ウグイスのさえずりはほとんど春本番。一方、ほとんど声も出さず低い枝を活発に飛び回っていたのは、ほっそりしたジョウビタキ(ビジョウちゃん)、真冬には羽をふくらませてまあるい姿だったけれど、北へ帰る日も近い？道路を隔てて、2羽のウグイスが交互に鳴き交わし、もう歌比べの気配。ウグイスはいまだに見つけにくく、この日も声を頼りに目を凝らし（聴いた感じと実際の遠近がいつも微妙にずれる）、ようやく発見。さえずってはささっと枝や幹を動くようすをかなり長い時間見せてくれた。オオルリやホオジロは樹のてっぺんで、小さなミソサザイは岩や切り株などで、静止して独唱、みたいな姿をよく目にするけれど、ウグイスは目立つところではあまり鳴かず、茂った葉や藪の内部などでせわしなく動き回っていることが多いので、油断すると双眼鏡の視野からもすぐ消えてしまう。KAZEさん、芦原のなかのもう1羽を撮影。まだ芽吹いていない林では、キジバトが、ひっそりと枝に鎮座、珍しい種ではないのでふだんあまり注意を向けないけれど、オレンジ色の虹彩や羽縁と枝の色合いなど、静かな調和に引き込まれる。先ほどのヒヨちゃんもいつの間にか近くの枝にいて、なかなか渋い表情。風はかなり冷たく、黄砂に微小粒子、花粉・・++;;とさんざんな大気状態のなか、鳥たちの周囲の空気は透き通っているように思えました。Photo by KAZE

yucca-note 2013.3.28

日曜 (2013/3/24)鳥見メモ・その2

河津桜にメジロなど



東京などで満開というのに、こちらではこの時ソメイヨシノはほとんどつばみで、一分咲き未満。数年前からこの近辺に多数植樹された始めた河津桜は満開。木はまだ小さいのにたくさん花をつけ、目を引く彩り。枝を揺すり、しきりに花に嘴を入れては蜜を食しているヒヨドリ2羽。写真を撮ろうとすると飛び去る。

メジロの小群はこちらにおかまいなく、ひたすら吸蜜、というか、ヒヨドリもメジロも、舌で蜜をなめとって (!) いるそうですが、そこまでは見えず*;;) どちらも、木の実や果実のほか、花の蜜を好み、サザンカや椿、梅の花にもよく群がってます (虫も食べる)。梅園などで、梅の花に来ているメジロを見て、あ、ウグイス、という声もよく聞くけれど、梅に鶯とはいうものの、ウグイスは花蜜はほとんど食べないようで、花の咲いた梅の木などでウグイスを見るのは難しそう。

メジロたちは満開の花のなかに見え隠れしながら、おおはしゃぎで蜜に夢中、といったようす。高音のトリルが微妙に変化しながら組み合わせさったような囀りは、ウグイスのように覚えやすくないけれど、耳にとってもこちよい。Photo by KAZE(逆さメジロと、別の木にいたヒヨちゃん yucca。30倍ズームにまだ慣れず、ピンぼけ多しー;)

yucca-note 2013.5.1

セイタカシギ

Himantopus himantopus 英Black-winged Stilt



1960年頃までは、日本では数年に一度渡来するくらいの迷鳥だったらしい。最近では繁殖が確認される地区もあり、珍鳥というわけではないけれど、やはり会えるとうれしいシギの筆頭。毎年見ているような気がしていたけれど、三年ぶりの出会い。白と光沢のある黒の羽色、ながーい脚の紅色は珊瑚のよう、よく見ると目もベリーのようには赤い。全長37cm（脚を含むと55cm）。蓮田で2個体を確認。撮影：KAZE



オオソリハシシギ *Limosa lapponica*

ソリハシシギ *Xenus cinereus*



この時期日本で見られるシギ・チドリ類は、大部分がシベリアやアラスカなどで繁殖、東南アジアやオセアニア地域など（日本でも）で越冬するもので、繁殖地と越冬地との往来、という長距離の渡りの途中、春と秋に日本に立ち寄っているわけですが（春と秋でコースが異なるものも）、シギたちとの出会いは、と地球の風・空気エレメントの大きな循環のなかにいることを思い出させてくれるようです。

☆オオソリハシシギ *Limosa lapponica* と

ソリハシシギ *Xenus cinereus*

セイタカシギを見た（4/13）のと同じ場所で、3月に見たオオソリハシシギ。こちらも三年ぶり。最初に見たのは河口の干潟、チュウシャクシギやハマシギなどと一緒だったけれど、かなり遠く、こういう蓮田で観察できると嬉し。水中に長い嘴を入れては採餌（泥のなかのゴカイなど）。静かに佇むと雰囲気じゅうぶん。わずかに上に反った長い嘴は先が黒く、基部は淡い紅色。夏羽だと、顔から胴体にかけてオレンジ色がかった赤褐色になって印象深い。

同じ場所で去年（4/28）はじめて見たソリハシシギ、画像では大きさの区別がつかないけど、オオソリハシシギは体長約41cm、ソリハシシギは23cm、小さなソリハシシギは嘴の反りが目立って動きも愛らしい。撮影：KAZE



yucca-note 2013.5.4

アカアシシギ *Tringa totanus*

タカブシギ *Tringa glareola*

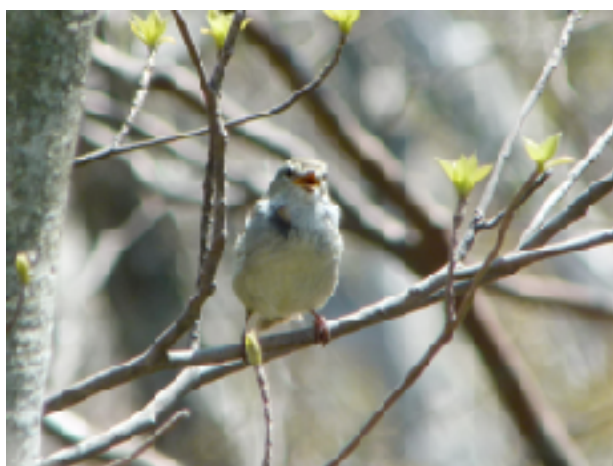


昨日夕方の鳥見。いつもの場所。時雨も止んだ頃、うれしい出会い。色鮮やかな脚に目を惹かれる。はじめて見るアカアシシギ。やはり初めての出会いはわくわく^^タカブシギと一緒に水中で採餌したり、堤で羽繕いしたり。セイタカシギに勝るとも劣らない、紅珊瑚細工みたいな脚。嘴も赤い。あまり警戒せず、ずいぶん近くで見せてくれた。一見同じような顔つきに見えるシギたちですが、脚の色合いだけでもそれぞれに個性的（キアシシギ、アオアシシギなど最近見ていないけれど）。アカアシシギは全長27cm、タカブシギ（鷹斑鳴）は21.5cm。撮影：KAZE /yucca



yucca-note 2013.5.7 ブナの芽吹きとウグイスCettia

diphone



県立森林公園。標高800メートルを超えるので、まだ春の芽吹きははじまったばかり。鳥取県境の稜線を望む展望地。少しずつ芽吹き始めたブナやミズナラの原生林のなかに濃緑の杉木立が点在。園内ではオオルリやキビタキ、ミソサザイなどのさえずりがちらほら（オオルリの姿も見えたけれど、写真はボケボケ）、ウグイスのさえずりは遠近いたるところに響き渡る。展望地に登っていく途中、頭上の梢で高らかにさえずっていたヒガラの近くにウグイスが飛んできてさえずり始め、まさに歌合戦の様相。ツピン・ツピン・・・と高音で愛らしくもせいっぱい繰り返す感じのヒガラ、微妙に音程、音色の異なる、思い入れたっぷりのほ～ほけきょ、のヴァリエーションで圧倒するようなウグイス・・・しばらく競演？に聞き惚れていると、そのうちヒガラが飛び去ってしまう^^；ウグイスのさえずりも、さまざまで、いわゆる谷渡りの声（ケキョケキョケキョケキョ・・・と早口で繰り返すところ。警戒声と言われる）にしても、もちろん個体差もあり、時と場合にもよるのか、速さやリズムもいろいろで、おもしろかったのは、去年別の公園で、装飾音を入れた技巧派、といった歌い方を聞いたり、と興味は尽きず、ウグイスはじめいろいろな鳴禽の声を聞き比べる文化があったことも肯けるところ。内田百閒の随筆に、昭和初期の日暮里での、鶯の啼き合わせ会の話（『銘鶯会』『続銘鶯会』）がありますが、こちらは、一陣の風と「銘鳥」の囀りの余韻がひそやかに響き合うような・・・結び。画像は歌合戦とは別のウグイス。ちょうど芽吹き始めたブナの枝で歌っていました。ウグイス写真はKAZE.

花芽喰うウソ



先月14日、遅いお花見。旭川上流のダム湖からさらに奥の公園。ソメイヨシノの花はもう終わりかけていたけれど、ヤマザクラの紅い葉と花、いちめんのツツジの彩りに心はなやぐ。コバノミツバツツジ？は、濃すぎない花色に葉の浅緑が清々しい。ここには鶯鳥（うそどり）大明神なる祠があり、でも今まで何度か訪れても、まったくウソの気配はなし。このちょうど4週間前（3/17）、もしかしたらウソにまた会えるかも（この冬はあちこちに出没しているらしいので）、とあまり期待せずに来てみたら、フィー、フィー・・・と、細いけれど独特の笛の音のような声、そして、合わせて10羽ほどのウソの群れ・・・！ウソがいるってうそじゃなかった(笑)

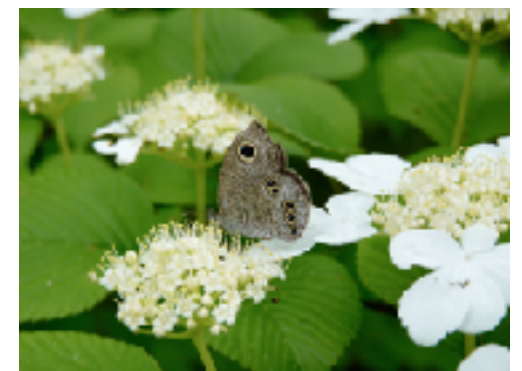
）そっと近づくと、枝に留まったウソたち、桜の枝についた蕾を次から次へと、食べる食べる、真下に行ってもほとんど気にせず、ひたすら食べ続けてました（^^;）。はじめてウソを見ることのできた昨年12月、自然保護センターでヤマザクラの花芽を食べていたのは、喉の紅みが胸にかけてぼかされた感じのアカウソ（亜種）らしかったけれど、ここで見たのは、喉や頬の紅色と胸の灰色がくっきりと分かれていて、つまりアカウソでないウソ。囓られた蕾の内部は開いた花びらよりも鮮やかな紅色。花の色は惑星界に由来し、花の宇宙への憧れは、蝶（や鳥）の飛翔につらなっていく・・・？などとシュタイナーの言葉を思うにしても、この調子で大群が押し寄せたらたしかに、と少々気になるところも。あとで見た町のHPによると、平成9年、実際にウソに花を食べられてしまったことがあるが、ウソを敵視せず、共存しようということで、以来うそ大明神として祀られているとのこと。ウソの撮影：KAZE. ウソ *Pyrrhula pyrrhula* 英 Bullfinch 独 Dompfaff/Gimpel 味わい深いけれど、あまり変化のない鳴き声、と思っていたら、いろいろな節回しを聞き分けて真似ることができるというので驚き。かつてドイツ（ハルツ地方など）では民謡の節回しを巧みに真似る鳥として、調教されていたこともあったとか(W.Streffer :Magie der Vogelstimmen 参照)。

yucca-note 2013.5.19

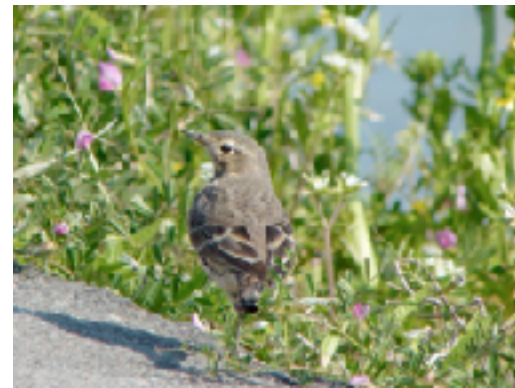
キビタキ・ヤマツツジほか



初夏の昼下がり、自然保護センター散策。ヤマフジの花はもう終わり、日射しに映える朱赤のヤマツツジ。ホトトギスとウグイスの声をメインに、蛙や春ゼミの声も混じり、にぎやか。少し奥まった林ではミソサザイとキビタキのさえずり、葉が茂り始めて鳥の姿を見つけるのは難しくなったけれど、声を頼りに、口笛でさえずりの節回しをちょっとまねたりしながら（へたくそ、と思われてるだろうけど^^;;）、ねばった末、今年はじめてキビタキ♂の姿を見ることができました。後頭部などに褐色部分がまだらに残る、まだ若鳥らしい個体。薄暗く、枝の奥で、残念ながら画像はぼけ^^; オレンジがかった黄色部分は鮮やかで、やはり何度見ても見飽きない。学名Ficedula narcissina、英名Narcissus Flycatcher。水仙と化した美青年ナルキッソス伝説は、黄水仙を思わせるキビタキに似つかわしい。木陰の白いヤブデマリが浮き出るようにうつくしく、その近くで見たキンモンガ（金紋蛾）、黒地に黄色い模様が浮き出て、キビタキ♂の羽色とどこか照応しているようにも思えたり。ヤブデマリの花にいたのはヒメウラナミジャノメ？黄色い縁取りの蛇の目紋の中心に深い青色部分があつて、なかなか奥深い。（キビタキ撮影：KAZE）



春の水辺のシギ・チドリ、タヒバリ



シギ、チドリたちの春の渡りもそろそろ大詰め。先月と今月初めに水辺で会えた鳥たちの画像です。（撮影はKAZE）

タシギ（*Gallinago gallinago* 英:Sneip 独:Bekassine / Himmelsziege）。いつも果実やリュートみたいな楽器を連想する丸い体に長い嘴、つぶらな目。。小さな群れで、長い嘴を土中に差し込んで採餌している場面を見ることが多い。水中じいっとしている姿も赴きあり。飛び立つときに、ジェットと鳴くというけれど（^^）、あまり声を聞いたことはなし。ディスプレイ・フライト（繁殖期にがに求愛するときの誇示飛翔。繁殖期の夏には日本にいない）のときは、ヤギのような声で鳴くそうで、ドイツ語の別名 Himmelsziege（天の雌ヤギ）もこの鳴き声から来ているようです。英語名Sneipは、Sneiper(狙撃手、シギ撃ち)の語源

（!）。（ダイナミックなディスプレイ・フライトで有名なオオジシギは、ひとまわり大きな夏鳥で、かつては県北の蒜山高原の初夏の風物詩だったとか。一度も見たことがないのは残念。）

タカブシギ。羽の模様が鷹の羽に似ているので鷹斑（タカブ）シギ。*Tringa glareola* 英:Wood Sandpiper 独:Bruchwasserläufer。少し小さいイソシギ（留鳥）は、腹部の白色部分が、翼の付け根の前側に食い込んでいるのがポイント。

Actitis hypoleucos 英:Sandpiper 独:Flussuferläufer

春の草花のそばにいたタヒバリ（冬鳥）、ヒバリ科ではなくセキレイ科。セキレイのように尾を上下に振って歩く。*Anthus spinoletta* 英:Water Pipit 独:Wasserpieper

丸い目を囲む金色のアイリングがキュートなコチドリ。夏鳥。

Charadrius dubius 英:Little Ringed Plover 独:Flussregenpfeifer
前に見たのとは別のセイタカシギ。頭に黒い部分がほとんどない個体。ちょっと小坊主さんみたい? ^^。蓮の茎を映す水面に佇み、独特の雰囲気。「鳴の看経（かんきん）」という言葉もあるそうで。。

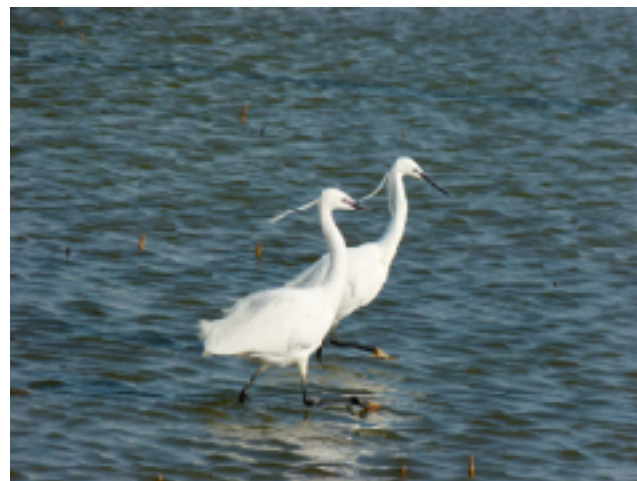
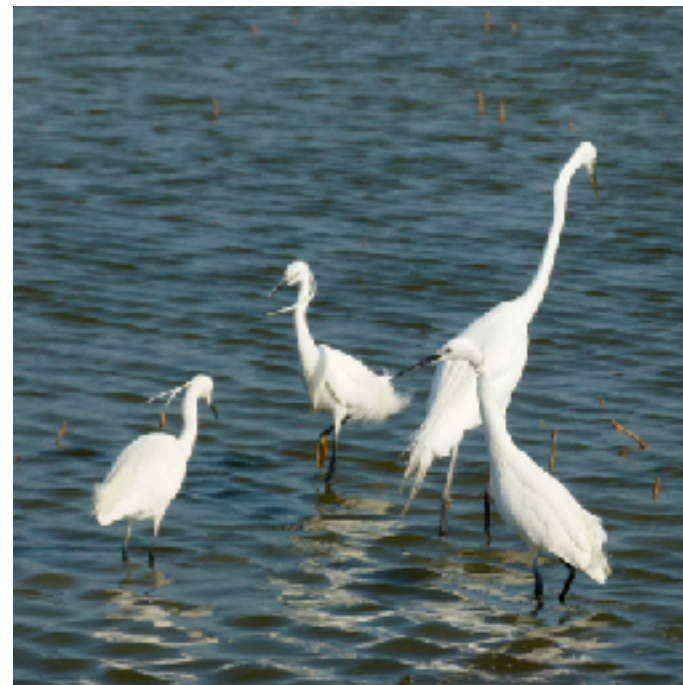
yucca-note 2013.5.31

白鷺たち



一ヶ月半も前の画像ですが・・・水を張った蓮田の白鷺たち。夏羽になると、背中に繊細な飾り羽が生えて（コサギは頭に2本の冠羽も）、控えめな華やぎ^^。

4羽の白鳥ならぬ、大きなダイサギ1羽に、コサギ3羽。今ひとつ関係性はよくわからないものの（^^?、静かな交流、といった雰囲気。吹き渡る風に、水面も羽毛もさざ波立ち、際立つ白。撮影：KAZE



yucca-note 2013.6.25

キビタキ



久しぶりの大山山麓。登山道入り口近くの駐車場に降りてすぐ、さまざまな鳥たちの合唱に混じって、サンコウチョウの囀りも聞こえたような。大山寺参道沿いの山林ではあちこちでキビタキの囀り。最初に会えたキビタキは、節回しをまねしていると近づいてきて、枝陰に見え隠れしながら歌ってくれました。キビタキの囀りは、鈴の音のような高音を含む比較的ゆっくりした鳴き方との後、速いテンポの繰り返しがあって、コジュケイの囀りやツクツクボウシの鳴き声をアレンジして組み込んでいるようだったり、ちょっとしたカデンツァのようにも聞こえますが、この個体は、ほんもののツクツクボウシかと思うほど巧みに、オオシーツクツク…と繰り返してました。ちょっと暗くて写真のピントは合わなかったようだけど、こちらに背を向けて、ちょうど駐車場近くで見たキセキレイそっくりに尾を上下させたり。この後も3～4個体のキビタキをかなり近くで見ることができて、美しい姿と声に見とれ聞き惚れ・・・高い樹の枝にいるオオルリの囀りはしばしば聞こえるのだけれど、かろうじて青色が確認できる程度でこちらはちょっと残念。(撮影：KAZE 6/16) 捕まえた虫を咥えて満足そうなの？キビタキくん。5枚目はしきりと羽繕い。



カッコウ



キビタキに楽しませてもらった大山の森からの帰途、夕暮れの蒜山高原へ。ここ数年、ここでもいろいろな野鳥に出会うことができたけれど、今年こそ、高原ではお馴染みのカッコウ科の鳥、ホトトギスやカッコウ（これまで声はすれども、姿を見るのはほんの一瞬）、できればツツドリ（ボボ・ボボ・・・と単調に鳴く声のみで見たことなし）、ジュウイチ（声も聞いたことなし）とかしっかり見たいね、と話していたところ、車道沿いの電線に、尾羽をぴんと上げた独特のシルエット・・・！大慌てでカメラ構えるKAZE、わりに長いこと留まってくれて、撮影に成功。最初、ホトトギスかカッコウかよくわからなかったものの、飛び立って、ひと呼吸置いて、カッコウ・・・カッコウ・・・と、ちょっととぼけたような声^^♪ 鳴きながら飛んでいる姿をちらっと見たのがもう十年以上前（広島に住んでいた頃、島根の三瓶山で）ということもあって、とても嬉しい出会い。黄色いアイリングのぐるぐるとした目もしっかり見え、見渡せば黄昏の蒜山のなだらかな稜線・・・(6/16 カッコウ写真はKAZE)

カッコウ *Cuculus canorus*/ 英 Cuckoo/ 独 Kuckuck 全長35 cm ホトトギス（全長27.5cm）よりかなり大きめ。ホトトギスは主にウグイス、カッコウはオオヨシキリ、モズ、ホオジロなどに託卵すること。

yucca-note 2013.7.12

オグラセンノウ、カワラナデシコ



梅雨明け模様の七夕の日、県自然保護センター散策。
木々の緑はまださわやか、とはいえ、午前9時前ですごい暑さ（**；）。湿性植物園のオグラセンノウ（小倉仙翁）がひとときわ赤く、深い切れ込みのある花卉も、燃えたつ火焰を思わせる。朝鮮半島北部、九州、岡山県と広島県の一部にしか自生していないという絶滅危惧種。数少ない自生地、鯉が窪湿原（岡山県哲西町）で初めて見ってから、もう十数年。以来ほぼ毎年見ているけれど、青みをほとんど感じさせない赤は、見るたび火の花、赤い火星の花の印象。そういえば、鯉が窪湿原の近くには、赤いベンガラ色の町並みが残る吹屋というかつての銅山の町があり、吹屋銅山からは、磁硫鉄鉱も採掘され、ベンガラ（酸化鉄を成分とする）の原料に使用されたとのこと。かつて、この近辺には数多くの鉱山が稼働していたらしく、哲多町、哲西町、などという地名も、鉄～金属めいたものを連想してしまったり。それはともかく、鳥の姿はあまり見えなかったけれど（ネムの木にいたコサメビタキくらい）、汗だくになりながらも、いろいろな花や虫たちに目を引かれ、うろうろと数時間。（オグラセンノウ写真：KAZE)